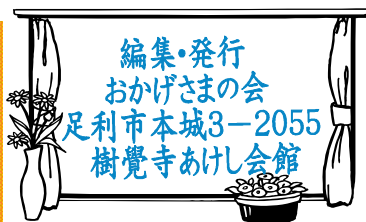


おかげさま



おぶっぱん

京都、西本願寺では、毎月朔日さくじつ ついたち(一日、一月のみ六日)じんちようの晨朝勤行の後に、御影堂ごえいどうにおいて

「ぶっぱんぎよう仏飯經」が勤まります。しかし、「仏飯經」という名のお経があって、そのお経を読むのではありません。「つぶさ仏飯經」を具にいうと「しょくこくぶっぱんこう諸国佛飯講えいたいきようほうよう永代経法要」といいます。全国各地にある御仏供米を上納する講社こうしゃ(同じ信仰、同じ志しを持つ者の集まり)がいつまでも続き、毎朝お仏飯をお供えしそな仏恩報謝ぶつとんほうしゃの勤行がいつまでもつづきますようにと願って行われる法要です。



晨朝勤行、御影堂において「しゆくでん御祝奠もちあんこ(お餅と餡子を仏飯器にお仏飯と同じような形に盛ったもの)も」をお供え後にしょうしんげ正信偈が勤まります。正信偈が終わった後、平常のお仏飯に供え変えられ、「しゆくでん仏説阿弥陀經」が勤まります。これが「おんぶつじ仏飯經」です。仏恩報謝、報恩謝徳の御仏事ですあります。



「お仏飯いただきます(一人)」

うちでは一年中毎朝本堂とお内仏ないぶつにお仏飯をお供えし お昼に下げていただきます。お仏飯は仏さまや亡くなった方のご飯ではありません。お仏飯はあなたの「いのち命」を表わしたしょうごん莊嚴(お飾り)です。仏さまから私の命を「いただきます」と感謝して手を合わせます。

私の命だから大切にするのはではありません。もともと私の命ではないのですから。命を自ら作り出せる人は誰もいません。仏さまからお預かりした命だからこそ大切に大切にに使わせていただきます。

逆に命を自分のしょうぶつ所有物だと思い始めた途端に私たちは闇やみに墮ちます。自分のものでないものを所有物と思い込めば、今度は所有物であることを証明しなくてははいけません。しかし「だれかに認めてもらわないと」「役に立たなくなっ





「たらおしまい」といつも心は不安不足です。

お仏飯とは仏さまと私の命を分かち合うことの象徴です。お仏飯を通して命の繋がりを教えられます。手を合わせて「いただきます」この言葉には広大な背景が込められています。当たり前前あたりのまへのことを当たり前あたりのまへにすることで気付かされることがあります。



本願寺第二十代宗主しゅうしゅこうによ 広如上人のお示しくださった言葉の中に、「私たちは、日に三度いわん(意識的あるいは止むを得ず回数を増減する人もいます)食事をします。況や、日に一度のお仏飯そまつを粗末そまつにしないように」との言葉が見られます。また「自分の住んでいるところはお掃除をぶつだん(しない、できない人もいますが)します。お仏壇ぶつだん(阿弥陀さまのお住まい)の塵ちりを払いなさい」なんて言葉もあります。

御影堂ごしんねいの御真影様ごしんねい(宗祖親鸞聖人のお姿)にお供えするお仏飯は、なんと、2升しょう以上のご飯で盛り付けられています。毎朝、御堂みどう近くのお仏飯所ぶつばんしょ(お仏飯



を炊く専用た せんよう すいじばの炊事場)ですべてのお仏飯のご飯が炊き上げられ、蓮の蕾型はす つぼみ もに盛り付けがなされます。阿弥陀堂、御影堂、お内仏、全部でどのくらいの量になりますか……。

お下げさした後のお仏飯はどうなるのでしょうか。樹覚寺では、お下げしてすぐに、あまり固くならないうちにそのまま、または、薄く伸ばして焼いて煎餅せんべいみたいにして頂きます。

ご本山では、以前は、お下げした仏飯は、解ほぐして干ほして、干飯ほしい ほしい(糰)の状態にしました。それを、お齋とき きょうに供しました。47年前、勝如上人しょうによから度牒どちようをいただいた翌朝、本刹ほんせつ・本廟ほんびようにお礼参拝れいの後、対面所たいめんじよ(鶴の間こう ま)でお祝いの食事をいただきました。お赤飯せきはんと白みその汁しる。申しわけないことですが、ボソボソしたお赤飯をありがたくかんげき(感激しながら、美味おいしかったかは?)いただいたことは今でもおぼえています。

今では、ご門徒もんとうさんにお下げ渡しになるものと消費するものと、加工するいろいろと工夫しているようです。

あけし酔話

お釈迦様の生涯 降誕(こうたん)

仏伝によれば、ルンビニーの花園で休憩中に、マーヤー夫人がアショーカ樹(無憂樹)の花房を手折ろうと右手をあげた瞬間、右の脇腹から王子が誕生した、ということです。通常とは異なることをもって、お釈迦さまが偉大な人物であるということを伝えようとしたのでしょう。

いずれにしても、尋常なお産でなかったことは確かです。産み月より逆算して旅立ったのでしょうから、旅の途中ということは、早産であったと同時に、何の設備もない道端での出産は、当然難産であったことは想像にかたくありません。そのためなのでしょうが、マーヤー夫人は王子を出産後、すぐにこの世を去っています。

生母は、王子の誕生より七日目に亡くなったと伝えられていますが、「マーヤー」とは幻影と訳せますので、王子の誕生と引き換えにこの世を去ったという、彼女の幻のような生涯を伝えるために、後の仏伝作者によってその名が贈られたのかもしれない。

王子は、シッダッタ(目的を成就した者)と名づけられ、マーヤー夫人の妹である、マハーパジャーパティーによって養育されました。

王子が城に戻った頃、ヒマラヤ山中に住むアシタ仙人がカピラヴァトウに来ていました。父王がさっそく仙人を城に招き、王子を見てもらうと、仙人はただちに眉をひそめ、ハラハラと涙を落とすので、驚いた王がその理由を尋ねると、「この王子は、三十二の偉大な相を備えている。家があれば転輪聖王(全世界の統一者である理想的な帝王)となり、出家すればブッダ(覚者)となられるであろう。しかし、自分はもう歳を取りすぎており、とてもその姿を見ることはできない」との答えに、王はよろこびとともに不安を感じるのです。

王子には、雨期、乾期、冬期を快適に過ごすことのできる三つの宮殿が与えられました。そして、養母の慈愛あふれる生活を送っていましたが、“母の死”は少年シッダッタの人格形成に大きな影響を与えました。彼はいつしか人びとから離れ、静かに瞑想することを好む、孤独が好きな少年に成長していきました。

ところで、花まつりのことをなぜ「降誕」というのかご存知でしょうか。

「誕」という字は、いつわり・あざむく・うそなどの意味があります。言葉を延ばす、すなわち話に尾ヒレをつけるということで、真実ではないことを表します。

つまり、真実でない世に生まれた私どもに、真実を知らせんがために、真実の世界より降りてくださったということを表しているのです。これは、誕生と同時に“七歩”あゆまれ、「天上天下 唯我独尊 三界皆苦 我当安之」と宣言されたことにつながります。「苦の世界に、我まさに安らぎを与える者にならん」という願いを表してくださったのです。

【つづく】



あけし あれこれ ビワ (枇杷)



今年は去年の暮れから暖かな日が続いていたせいか、水仙やろうばい、梅など早くから咲き出し、香り豊かな年明けでした。冬は花の少ない時期ですので、木の上の花にはなかなか気づきません。そんな時期にひっそりと咲いている花がありました。小さくて、地味な花なので、

気づかぬうちに時期を過ぎてしまうことが多いです。木の上の方なので、なかなか判りませんが、甘いいい香りの花を咲かせています。今はもう小さな実が寄り添って付いています。

ビワ (枇杷) バラ科ビワ属 自生・植栽。常緑高木・高さ5～10m

語源 果柄をつけた果実の形が楽器の琵琶に似ているところからついた名前といいます。また、長い葉の形が琵琶に似ているからともいいます。四国や九州の石灰岩地に野生のビワが見られますが、栽培されるものがほとんどです。長崎県茂木村 (現・長崎県茂木町) から広まった茂木ビワ、その種子からできた田中ビワなどの栽培品種があります。樹覚寺の枇杷は実生で、勝手に生えて大きくなりました。大きくなるのが早いです。今は、鳥たちのごちそうになっています。実が色づいてきたなと思っていると、ほぼ1日で無くなっています。

花期 11月～翌年2月。円錐花序をつける。

果実期 6月。梨果。

花の色 ふつう、白色の5弁花。1. 5～2

cm **果実の色** 黄褐色に熟す。果実は長さ4～

5cm、広倒卵形の梨果。



薬用として葉を乾燥して煎用すれば、食当り、腹痛などに効ありといわれる。また、枇杷の葉を焦げない程度にあぶって患部をなでる療法もある。材は木質美しく弾力性も強く、木刀には第一級のものとされる。